

学生支援の現場から

◆同志社大学  
「学生が学生を巻き込む」支援という視点から

桂 良彦

(同志社大学学生支援センター  
京田辺校地学生支援課長)

今日、本学が取り組む『学生支援』は、学生支援センターに限っても「クラブ・サークルに対する課外活動支援」「学生生活支援」「学生相談」「奨学支援」を推し進める傍ら、「一連の正課外教育プログラム」「障がい学生支援」「学生の手による地域連携」を積極的に展開するなど、実に広範囲に及んでいる。

ところで、私が勤務する京田辺校地は、主として一、二年次生が学ぶフレッシュなキャンパスであり、それゆえに日常的には生の先輩との交流の場が少ないキャンパスでもある。学生時代のクラブ・サークル経験者は容易に思い起こせると思うが、低年次生にとって上級生の振る舞いはま

ぶしく、上級生を見て自らの行動規範としたことも多かったのではないか。

このような背景に一般の学生気質の変容への対応があいまって、同志社大学では学生支援の取組を進めるうえで、「学生の活用」は欠かせないひとつの「しかけ」となっている。彼ら／彼女らは、多くの場合京田辺キャンパスOB／OGであり、四月当初のオリエンテーションウィークにありとあらゆる相談に応じるぴあアドバイザー、開講期間



ぴあアドバイザー

中に特定のトピックについて下級生の相談に乗るぴあメンター、フレッシュャーズキャンプにおける学生スタッフ、S-cubeセミナー・先輩に聞くシリーズ講師など、正課外教育プログラム群の一端を支える主役となっている。

主役を担える要因とし



ぴあメンター



フレッシュャーズキャンプ

生のインセンティブが高まり、コミュニケーション能力をはじめとした人間的成長にも着実に寄与していることにある。その結果、「学生が学生を巻き込む」スパイラルとなって、例えば三〇〇名に及ぼんとする障がい学生支援制度のサポートスタッフ登録者に象徴されるように、そこで得られたうねりと成果を再び大学コミュニティに還元してほしいという大学の意図に応えてきている。ただ、これらの取組を結実させるためには、大学として「先輩」との周回な事前の打合せや研修の施しが欠かせないことは言うまでもない。



S-cubeセミナー

「先輩、大学院ってどんな感じですか？」

ては、①少し前までは同じ面持ちで学生生活を過ごしていた訳で、向き合う学生の気持ち理解できる、②一定の目標を成し遂げた学生の言葉は、まだ生暖かい経験に裏打ちされており説得力がある、③その結果、耳を傾ける学生の腑に落ちる（聞く体勢になっている）、④ポイントを抑えて実に誠実に対応してくれる、などがあげられよう。

ここで着目すべき点は、単に学生間のへ支える側へ支えられる側という関係性を超えて、へ支える側へ支